【審査論文】

シャルル・フーリエの建築構想における「循環」

小澤京子

Flow and Circulation in Charles Fourier's Architectural Projects

OZAWA Kyoko

要旨

フランスの思想家シャルル・フーリエ（1772- 1837年）は、その理想社会構想において、新しい社会秩序は新しい建築を必要とするとの発想に基づき、共同体内の個々人の行動を促すような建築案を提示した。たとえば、共同体を構成するメンバー間の紐帯を強めるために、系列房（セリステール）（sériستère）や回廊式通路（リュ＝ギャルリ）（rue-galerie）など、「流れ」や「循環」を重視した建築空間を構想している。この空間における人の「流れ」や「循環」という発想は、同時代の都市や建築と身体の関係を考察するうえでの鍵語でもあった。フランス革命後の18世紀末から19世紀にかけては、ルーヴル宮グランド・ギャルリやパサージュなど、遊歩のための回廊空間が次々と作られた。また、フーリエとほぼ同世代の思想家サン=シモンに影響を受けた技術者たちは、やがてフランスの都市計画・国土計画において「流れ」や「ネットワーク」を重視してゆくこととなる。

本稿は、建築や都市によって創出される空間の性質と、人間の身体の関係を分析する研究の一部をなすものである。建築・都市空間と身体の関係にはいくつかのレベルがある。フーリエに即して考えるならば、都市や建築の構造と人体とのアナロジー（例えば「循環」の比喩）というレベル、それから空間の構造が人間の身体（身体の規律訓練や身体を伴う活動主体による行動）に及ぼす影響や統制というレベルである。本稿で扱うのは、もっぱら後者の文脈での「身体」である。

キーワード： シャルル・フーリエ／ Charles Fourier、建築構想／ Architectural Project、ファランステール／ Phalanstère、循環／ Flow and Circulation、パサージュ／ Passage

1．序論

1.1. はじめに

本稿では、フーリエの社会改革思想のなかでも、『産業の新世界』（初版1829年）中心に展開される建築構想に焦点を当て分析を行う。とりわけ、彼が重視した「回廊式通路」のもつ「循環、流れ、移行、回遊、内部と外部の区別が曖昧な多孔性」という性質に注目する。これは、フーリエの先行世代である革命期の建築計画にすでに胚胎し、19世紀前半にはパサージュ・クーヴェルという実現された建築空間として、近代都市パリの「モデルニテ」の象徴ともなった要素である。本稿では、このような時代の文脈を念頭に置きつつ、フーリエの固有性を抽出することを試みる（第2 ～ 3節）。また、このテーマに付随する論点

和洋女子大学 人文学部 日本文学文化学科

として、フーリエによる建築構想の図的表現、つまり紙のうえでの代理的な再現の分析も行う（第４節）。

1. 2. 循環のための通路

屋根つきの回廊空間という発想は、18世紀後半の理想都市計画から特徴的に現れてくる。フランス革命期の建築家クロード=ニコラ・ルドゥーはアルケ=スナンの王立製塩所（1779年竣工）の設計を手がけた際に、「効率化のための屋根つき歩廊」の設置を構想している（実現はしなかった）。アンシャン・レジーム下で「国王の建築家」であったルドゥーは、大革命によりその地位を失い、その後は「来るべき社会のためのユートピア的都市構想」へと転じてゆくこととなった。

この屋根つきの歩廊・回廊というアイディアは、決してルドゥーのみの奇想や空想の類ではなかった。代表的な例が、パリのパレ=ロワイヤルに設けられた回廊式の通路である。この場所はもともと王宮であったが、庭園は一般公開されており、市民たちも散策することができた。たとえばディドロは、このパレ=ロワイヤルを散歩する習慣を持っていたことを書き残している[1]。1780年代には庭園を取り巻くように店舗つきの回廊が建設され、小売商やレストラン、カフェが並ぶ商業空間となった。また、革命後の1793年には、ルーヴル宮の絵画廊グランド・ギャルリが一般公開されている。芸術作品を回廊（ガレリア）に飾ることはルネサンス期から行われてきたが、グランド・ギャルリの例が画期的なのは、それが一般市民に公開されており、「通過と回遊」や「見ることによる訓育」といった、新たな時代を画する性質の空間だったからである。19世紀に入ると、パリでは歩廊式商店街パサージュ・クーヴェルの建造が盛んとなってゆく。回遊性・循環性を確保した回廊空間は、革命期から19世紀にかけての都市空間と身体の関係を考えるとき、重要な場となる。

フーリエは理想の共同体を構想するに際して、新しい社会秩序は新しい建築を必要とすると考えていた（彼はルドゥーのような職業建築家ではなく、建築術の教育も受けてはいないが、きわめて「建築志向」の社会改革主義者だった）。彼の構想によれば、理想的共同体ファランジュにおける成員のための空間的装置が、ファランステールと名づけられた建築群である。このファランステールでは、住民どうしの交流を促進し、精神的紐帯を強めるために、回廊式通路（リュ=ギャルリ）や系列房（セリステール）など、「流れ」や「循環」を意識した空間の創出が目指されていた。

フーリエ以後の「流れ」や「循環」と都市・建築構想をめぐる系譜も概観しておこう。サン=シモン主義者たちは、ネットワーク状の流れ（réseau）という概念を重視するようになる。サン=シモン主義が国立理工科学校（エコール・ポリテクニーク）を中心に信奉者を獲得したこともあり、このような発想は19世紀初頭のエンジニア教育を介して、鉄道、運河、道路網整備といったフランス国土計画に多大な影響を与えることとなった。19世紀都市における「近代性（モデルニテ）」の特徴としてしばしば挙げられるのが、「流動性」や都市の群衆による「遊歩」であり[2]、またフランスの国土開発においては、交通網や通信網が身体における「循環」との類比で捉えられた[3]。本稿で扱う内容は、このようなより巨視的な建築・都市と思想との関係史のなかに位置づけられるものである。

1. 3. フーリエについて

本論に入る前に、シャルル・フーリエとその思想について、概略的に示しておこう。シャルル・フーリエは1772年、ブザンソンの商業者の家に生まれ、1781年の父の死以降は、しばらくヨーロッパ各地を遍歴する。1791年のリヨンを皮切りに、パリ、ルーアン、マルセイユ、ボルドーで小売店員や行商人の職に就き――この出自と職歴は、フーリエ思想の経済・産業的な側面に影響を及ぼすこととなる――、同

時に自身の社会構想について執筆を始める。1808年に最初の著作『四運動の理論（*Théorie des quatre mouvements et des destinées générales*）』が刊行される。彼の著作は同時代からは白眼視されたが、他方で熱心な弟子たちも周囲に集まり始めた。弟子たちの督促もあり、1822年には『家庭と農業のアソシアシオン概論（*Traité de l'association domestique-agricole*）』全２巻を[4]、次いで1829年には『産業の新世界（*Le nouveau monde industriel et sociétaire …*）』初版を刊行した。晩年にはパリに移住し、パレ=ロワイヤル――革命直前の初のパリ滞在の折に魅了され、彼の建築構想の着想源ともなった――のカフェや読書室で日がな執筆を行う。1837年パリにて没した。

フーリエの思想は、その弟子たちの思惑もあり、後の世への伝達は制限的なものであり、それはときに不正確な神話化ももたらした。フーリエ思想（として後世に伝えられたもの）は、エンゲルスにより「空想的社会主義」と批判的に概括される一方で、アンドレ・ブルトンらシュルレアリストたちからは称揚された。しかし、空想や幻視といった性質とフーリエ思想を結びつけるこのような受容は、彼の遺した膨大な草稿の再発見と実証的な研究により次第に修正され、よりフーリエのテクストに即した解釈が行われるようになった。この動向の口火を切ったのは、草稿版を元に『愛の新世界』の公刊を成し遂げたシモーヌ・ドゥブーによる一連の研究である。次いでジョナサン・ビーチャーが、一次資料の網羅的な研究に基づき、フーリエの生涯と思想を明らかにした。日本においては、2000年代以降はフーリエの専門家である福島知己により、フーリエ著作やビーチャーによるモノグラフィー研究の翻訳と紹介が進められている。

他方でフーリエの発想は、シュルレアリストと並んで、哲学者たちのインスピレーションを刺激するものでもあったようだ（この点で、フーリエ思想の受容過程はマルキ・ド・サドと共通点が多い）。ヴァルター・ベンヤミンは浩瀚なプロジェクト『パサージュ論』の冒頭に置いた論考「パリ――19世紀の首都」で、フーリエの建築構想に一節を割き、その本質はパサージュであるとしている。またロラン・バルトも著作『サド、フーリエ、ロヨラ』で、この思想家におけるとりわけ性愛と美食の契機に言及する。

2. 理想都市計画の着想の経緯

2. 1. 革命直前のパリ、パレ=ロワイヤルの衝撃

フーリエは、1822年になって最初のパリ滞在（1789年）を回顧し、そのときに受けた感銘が彼の建築構想の基盤にあることを告白している。

> いまから33年前、初めてパリの大通りを歩き回った折に、その外観から統一的（ユニテール）建築の構想を思いつき、まもなくしてその規則を定めた。この着想が浮かんだのは、アンヴァリッド大通り沿い、とりわけアカシア通りとヌーヴ・プリュメ通りの間にある二つの邸館のおかげである。[5]

この二つの邸館が何を指すのかは今となっては分からないが、当時の10区（現7区）のこの界隈は高級住宅街であったという[6]。

この最初のパリ滞在（数日間の短い滞在だった）の折に、当時17歳だったフーリエは、母親に宛てた手紙に、この大都市、とりわけパレ=ロワイヤル【図1】がもたらす感嘆を興奮気味に書き綴っていた。

> パリは趣味に合うかですって？　もちろんです。とても壮麗で、滅多なことでは驚かない私ですが、パレ=ロワイヤルを見たときには驚嘆しました。初めて見た人ならば、妖精の宮殿に足を踏み入れたかと思うでしょう。欲しいと思うものは何でも見つかります。見世物、壮麗な建物、遊歩道、流行の

服飾、しまいには人が望むであろうものの全て。［…］大通り沿いには岩窟を模したグロットやこぢんまりとした家があり、それらすべてが負けず劣らず美しいのです。それに加えて、美麗な建築物やテュイルリー、ルーヴル、船着き場や教会があります。ここは世界でいちばん心地よい地域だと言ってもよいでしょう。ただし馬車は必須で、それが無いと泥まみれになり、ぐったり疲れます。もっとも、健脚（bon marcheur）な私には必要ありませんが。（1790年1月8日付書簡より）[7]

パレ=ロワイヤルが、その後の商業的回廊式通路空間パサージュ・クーヴェルの原型となったことは前述の通りであるが、フーリエの建築構想に対しても、その原体験でありプロトタイプとなるような強烈な印象をもたらしたことが分かる。

【図1】1800年以前のパレ=ロワイヤルの通路と庭園（左）と1800年頃のパレ=ロワイヤルの光景（右）（左：作者未詳、フランス国立図書館 Gallica. ark:/12148/btv1b10303193z、右：アンジェロ・ガルビザによる水彩画に基づいたピエール=シャルル・コクレーによる版画《フランス人：パレ=ロワイヤルの回廊式通路の風景》1807年、大英博物館）

2. 2. 理想都市構想の萌芽――1796年12月ボルドー市当局宛書簡

18世紀の終わりには、フーリエはフランス各地を遍歴した経験から、とりわけ地方都市の街並みの単調さを憂え、「新しい種類の都市モデル」を構想するに至る。

ルーアンとトロワの都市の醜さに衝撃を受けて、私たちのものとはまったく異なる都市の計画を構想した。この都市計画の配置（distribution）については後に説明する（保障制度Garantismeの章）。以来私がたいへん貴重な発明と自負するこの都市計画は、家庭内の秩序に革新をもたらし、情念系列の計算の発明へと次第に導いてくれるだろう。[8]

そして、フーリエによればボルドーこそモデル都市建設の場に相応しい街であった。1796年、ボルドー市がトロンペット城跡の建築計画コンペを告知したことを受け[9]、フーリエは市当局宛に長い書簡を書き送っている。

ボルドー市は外国人を迎える一大玄関口であったから、ペテルブルクともフィラデルフィアともナンシーともマンハイムともカールスルーエとも、その他いかなる貧弱な都市ともまったく異なるように

建築された新しい種類の都市のモデルを全地上に提案するにきわめてふさわしい場所になろうと私は主張する。[10]

この書簡の時点で、すでにフーリエは都市の構造により空気や人の流れの「循環」を改善することの効果にも意識的であった。

私が作成した規則は、都市を大部分の村々よりもはるかに健康的にするものである。なぜなら、下層民が貧困地区の廃屋のごとき悪臭に満ちた汚水溜め同然の不潔な場所にひしめきあったりはできなくなるからであるし、住民がいかなる街区にも集中したりはしなくなるからである。[11]

彼の都市構想ならば「大火災を予防し有毒な腐臭を消し去る[12]」ことが可能だというのである。もっとも、ビーチャーも指摘するとおり、火災による被害や伝染病を防ぐためのオープンスペースの確保や大気の循環への配慮といった建築の準則は、すでに同時代人に広く共有されたものでもあった[13]。リチャード・エトリンの研究が明らかにしたところによれば、「大気の質」は1740年代以降の都市計画における最大の関心事であった[14]。

公共建築と民間建築を問わず建造物の建築を監視する責務を負う建築委員会が創設されるべきである。どのような家もその設計図が定められた規則に一致していると委員会が認めなければ建築できない。[15]

この時点では、フーリエの都市計画における「流れ」や「循環」は、先行する時代や同時代からの影響の強いものである。しかし、後には彼の建築と共同体にまつわる構想の根幹をなす概念となってゆく。このボルドー市当局宛書簡には、後年の著作において結晶化する思想の、ごく初期の萌芽を見てとることができる。

この書簡の記述は、構想中の都市計画のごく一部にすぎないことを、フーリエは前文で明言していた。その全体計画は、のちに『産業の新世界』（1829初版）で詳細に語られることとなるだろう。なおフーリエは、先行する時代のものであれ、同時代のものであれ、いわゆる「ユートピア思想」には冷淡であった。メルシエにもレティフ・ド・ラ・ブルトンヌにも批判的であり、ロバート・オウエンには手厳しい論難を加えている。ただしルドゥーは例外だった。その著作『芸術、習俗、法制との関係の下に考察された建築』（私家版、1804年）への言及はないが、この建築家が革命前に手がけたテリュソン邸については、建築の理想を見出すほどの高い評価を与え、彼の「調和社会」における建築のモデルとみなしていた[16]。

3. 構想の具現化と建築空間の特徴

3. 1.『産業の新世界』（初版1829年）

フーリエの社会改革構想の基盤にある、建築物とその配列はそこで生活する集団の秩序に即応すべし、という発想がついに本格的に詳述されるのが、『産業の新世界』（初版1829年）、とりわけその第2節第12章「建造物の統一的配分（Distribution unitaire des édifices）」である。フーリエの考えでは、新しい社会秩序は新しい建築を要請する。フーリエは自らの構想する理想共同体をファランジュ（軍団や結社を意味する一般名詞phalangeから）と呼び、このファランジュの成員が生活する居住空間をファランステール

（Phalanstère：ファランジュと修道院モナステールを組み合わせた造語）と名づけた。

彼はとりわけ、共同体の成員間の紐帯を増大させるような建築が求められていると考えていた。その一つの具現化が「系列房（セリステール）」である。これは同じ「系列（セリ）」に属するメンバーたちが会合に用いる一連の部屋のことだ。これは、フーリエ自身の規定によれば、「情念系列の交流のために配列される広間や部屋からなるまとまり[17]」である。

> 系列房とは情念系列の集まりが開かれる場所であり、われわれの公会堂とは似ても似つかない。われわれの公会堂では、交流はだれがだれをということもなく、段階性なくおこなわれる。われわれのものとでは、一回のダンスパーティ、一回の食事が形成するのはたったひとつの集会にすぎず、下位区分がつくられない。ソシエテール状態では、こんな無秩序は認容されない。ひとつの系列にはかならず三人、四人、五人の分団があって、それぞれが隣接する広間を占用する。各系列房にはそれぞれの分団の集団や密談用に、その広間のすぐ脇に付属する部屋と小部屋があるべきである。[18]

ここでは、社会制度とその内部に置かれる共同体の態様と建築物の構造という三要素が、互いに連関し合うことが求められている。

もう一つ、建築空間内の配置が共同体の秩序と人間の行動をコントロールするという発想が顕著に現れているのが、ソシエテール民に賃貸されるアパルトマンの「噛合累進」である。仮に絢爛な中央部ほど賃料を高く、両端にいくにつれて安くすれば、富裕階級と下級階級が分断されてしまう。そのような事態を避け、富裕、中間、貧困の三階級の間に、区分は維持しつつも協和をもたらすべく、部屋の位置と室料を互い違いに「噛合系列」で組み合わせるべし、というのである。

建物と建物を結ぶ連絡通路（communication）も、次項で詳述する回廊式通路（リュ＝ギャルリ）とならびフーリエの重視する要素であった。それは機能や効率の点で優れるのみならず、住民の内面に働きかけ、さらには行動を変容させるに至るというのだ。

> 連絡通路（原語les communications abritées）は富裕な人々にとってたいへん強力な誘惑源になる。［…］雨天や寒い日に、寄せ木張りやタイル張りの上を進んだり、あらゆる屋内の集まりに行ったり、天候に応じて暖房したり涼味をあたえたりできる回廊を歩くのが、いかにももっと楽しみになる。これが金払いのよい好奇の士にとって最初の胸躍るものとなり、あらゆる工房、家畜小屋を踏破して、そこで諸集団の機敏さや行儀よさ、分業化され段階づけられた配分に瞠目するよう煽りたてられることになる。三日から四日を過ぎると、彼らはこれらの分業化された細目の複数にすでに参加の意を決している。[19]

建築物の種類と配置により人々の交流――一種の循環と回遊――を望ましい方向に促進することを、フーリエは目指していた。いみじくもバルトは、フーリエの「建築物がその内部に暮らす人々の交流を促進する」という発想を取り上げ、次のようにパラフレーズしている。

> その結果［…］建築術と都市計画とがたがいに矯正し合って人間的な場に関する一般的科学の設立に貢献しているが、それにしてもこの場の第一の性格はもはや保護ではなく、循環なのである。ファランステールは、その内部をひとが循環する隠遁の場だからだ。［…］この組織体の主たる事業、それ

は交流である。[20]

ここでバルトが、住民たちの「循環」という契機に注目し、フーリエの都市・建築計画の「第一の性格」をそこに見出していることは注目に値するだろう。

3. 2. 回廊式通路という建築形態と循環、流れ、多孔性

ビーチャーも「フーリエのもう一つのきわめて重要な建築上の革新は「回廊式通路（rue-galerie）」だった[21]」と指摘する通り、『産業の新世界』で展開されるファランステール建築計画のなかでも、とりわけフーリエが重要視したのが、「回廊式通路」である。フーリエはこの建築要素について、次のように記述している。

> 回廊式通路はこのうえなく大切な建築要素である。パリのルーヴル宮の美術館の陳列室をみたことがあれば、それが調和世界の回廊式通路のモデルであるとみなしてかまわない。調和世界の回廊式通路もまた、寄せ木張りの床で、二階に配置されており、その交差ヴォールトは教会のもののように、小さな交差ヴォールトが三列に並ぶのを避けるために、高く広く湾曲したかたちをとってもよい。［…］当該回廊式通路は、加熱や通風用のパイプ伝いに季節を問わず和らげられている［…］ソシエテール状態では移動がたいへん頻繁で、諸集団の会合にかかる時間は一時間半ないし長くとも二時間になるはずだけに、これら風雪や日差しを避けられる連絡通路がいっそう必要になる。[22]

このような回廊式通路の着想源としてフーリエ自身が挙げるのが、ルーヴル宮グランド・ギャルリ（1793年公開）とパレ=ロワイヤルであったことは前述した通りである。革命前のパレ=ロワイヤルは、官憲が立ち入れなかったこともあり、娼婦たちや革命主義者たちの溜まり場――ラディカルな自由・放蕩へと開かれた剣呑な場――でもあった。同時にそこは、商品が人々の眼差しに晒されるべく並べられ、消費の欲望を喚起する場という性質も帯びていた（この資本主義的な性質は、19世紀のパサージュにおいて顕著となる）。

フーリエが最初にパリを訪れたフランス革命直前の時期には、ちょうどガラス製のアーケードで覆われた回廊式小売商店街「パサージュ・クーヴェル」が建造されつつあった。19世紀都市パリの象徴であるこれらの屋根付回廊もまた、フーリエに大きな影響を与えたであろう。1786年には、パレ・ロワイヤルの南面にギャルリ・ド・ボワ（「木製の回廊」の意）が建造されたが、このガラス天井のアーケードは、パリを訪れた若きフーリエをいたく魅了した。1791年には最初のパサージュ・クーヴェルであるパサージュ・ド・フェイドーが、次いで1799年にはパサージュ・ド・ケール、1800年にはパサージュ・ド・パノラマが完成している。

フーリエの建築構想については、ベンヤミンが前述の「パリ――19世紀の首都」で指摘した性質が、しばしば引き合いに出される。ベンヤミンはフーリエの理想都市の本質を、パサージュとしての性質に見出す。

> パサージュに、フーリエはファランステールの建築上の範例を見た。［…］元来は商業的な目的に奉仕するものだったパサージュが、フーリエにおいては住居となる。ファランステールはパサージュにおいて構成される都市なのだ。この「パサージュによる都市」において、設計技師〔フーリエ〕

による建設は幻像（ファンタスマゴリー）の性格を帯びる。「パサージュによる都市」は、この世紀の後半に入るまでパリ市民の眼を引くことになる夢である。一八六九年に至ってもなお、フーリエの「街路―回廊（リュギャルリ）は、モワランが『紀元二千年のパリ』で描くユートピアにとっての設計図となっている。そこでは都市が、店舗や集合住宅によって、遊歩者にとって理想的な書き割りとなるような構造を採るのである。[23]

実際には、パサージュ・クーヴェルがパリのそこかしこに建てられ、この都市の一種のアナロジーともなるのは、フーリエのパリ滞在よりも後の時期である。彼の最初のパリ滞在の時期には、パレ=ロワイヤル付設のギャルリ・デュ・ボワと最初期のパサージュ 1・2点が存在するのみだった。実証的な事実という面から見れば、フーリエの回廊式通路構想にパリのパサージュ群が影響を与えたというのは不正確である。むしろ革命期に現れたパサージュのプロトタイプから派生した二つの流れがあり、建築として実現されたのがパサージュ・クーヴェル、思想のなかで体現されたのがフーリエの回廊式通路構想というべきだろう。

しかし、ベンヤミンがパサージュについて与えた「一時的な／通過移動の（transitoire）目的のための[24]」建築物という規定は、フーリエの建築構想をとらえるうえで、未だに重要な示唆であるだろう。ベンヤミンはまた、パサージュは内部と外部とが曖昧であり、常に浸透や反転の行われる、いわば多孔的な空間であったとしている。フーリエのファランステールは、定住のための固定的な空間、外部からは隔てられた安全な親密空間、内部と外部との二項対立図式が常に保持される空間ではない。系列房（セリステール）や噛合累進、客人向けの隊商宿などを見れば分かる通り、構成員どうし、さらには外部からの来訪者との交流が常に促進される動的で多孔質の空間である。屋根つきの回廊式通路は、居住空間ではなく、一時的な通過や回遊を目的とするまさにトランジトワールな空間であり、地下通路もまた建築物に孔を開け、その間のコミュニケーションを可能とする装置である。

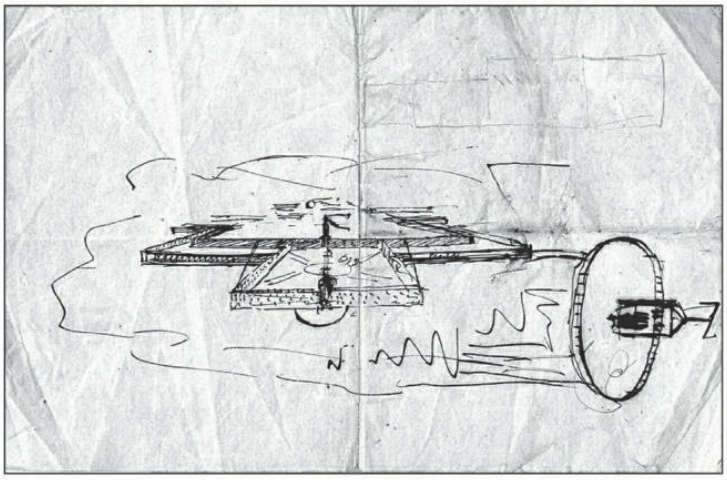
4. 補論：ファランステール建築図面とその変容が語ること

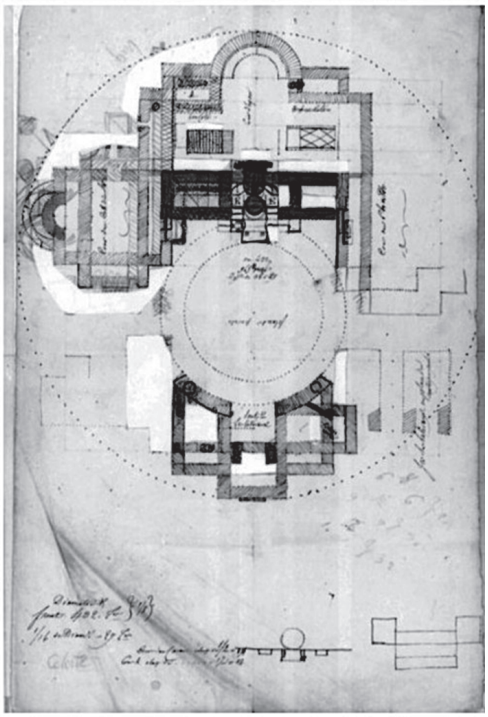
これまで論じてきたフーリエの建築構想を視覚化したものとして、ファランステールの図的表現の系譜がある。この図的表現には、フーリエ自身によるもの、彼とその弟子たちの共同作業によるもの、死後に弟子たちが作成したものがあり、制作者によって、また年代によって変遷を遂げている。すなわちそこには、フーリエの思想が弟子たちによる介入を経て、後年になるにしたがい具体化し、同時に変質してゆくプロセスを見て取ることができる。最初のフーリエによる図面は、単純化・抽象化された平面図にすぎなかったが、しだいに弟子たちの手によって、細部にいたるまで具体的に肉付けされた、写実的な透視図へと変化してゆく。従来のフーリエ研究は、これらの制作年代や作者を異にする図版を一絡げに「ファランステールを図示するもの」とみなしたうえで、テクストに付随する副次的な情報としてのみ提示する傾向にあった。本節では、ファランステールの図的表現の変容を時系列で追うことで、当初のフーリエによる図式的で抽象的な建築構想に、どのような要素が追加されていったのかを概観する。当初のフーリエによるファランステールの理念を、それ以降に加えられた追加や改変と比較し峻別することで、より明確に浮かび上がらせることができるであろう。

4. 1. フーリエと弟子たちの協働による『産業の新世界』初版の配置図（1829年）

フーリエはいくつかの建築（的）デッサンを残しており[25]、そのなかにはファランステールの平面図【図2】と透視図【図3】も含まれている。テクストの著者自身による図面であり、その後の「描かれたファラン

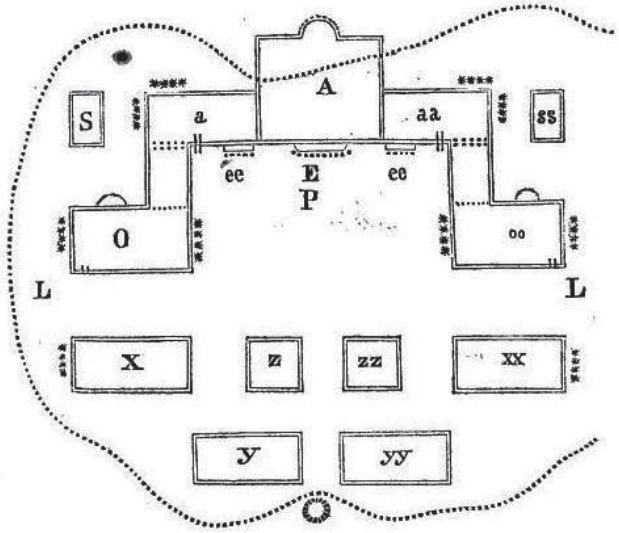
ステール」の変容、ないしは「翻案」ともいうべきもののプロトタイプとも言いうるものである。





左：【図2】フーリエ「ファランステールの透視鳥瞰図」1814年？
右：【図3】フーリエ「渦巻き、もしくはファランステールの平面図」1814年以前

フーリエがファランステールの具体的な構想を記述した『産業の新世界』1829年初版の第２節「試行ファランジュの装置」では、文章による説明に加えて、ファランジュの敷地内における建築物の配置を模式的に示した配置図「大階梯ファランステールの見取り図」【図４】が添えられた。福島知己によれば、これは共同体構想の具体化を要請されるなかで、それに応えるべく、弟子たちの協力も得て作成されたと考えられるという。「弟子たちがフーリエに要求したのは、実際的な指針であり、共同体建設の青写真だった[26]」と福島は指摘している。

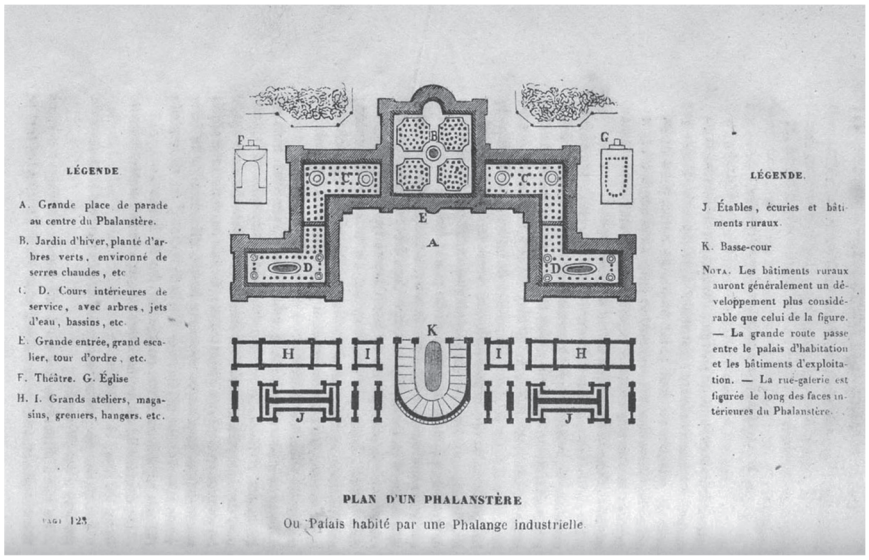


・点線：２本の運河
・二重線部分が建物（二重線に囲まれた方形の部分はすべて中庭）
・P：中央のパレード広場、長さ 200 トワーズ（約 390m）
・正面の長さ全体：360 トワーズ（約 702m）
・L-L：中心道路、上部の居住区域と下部の作業区域を分割する
・A：「名誉の中庭」、植栽のある冬季用遊歩道
・a と aa：建物間の中庭、一方が厨房、他方が厩舎と豪華な設備
・O と oo：両翼の中央に設けられた中庭で、一方は隊商宿（外国人用宿泊施設）、他方は騒音の出る作業所や子供の学校に当てられる
・S と SS：一方は教会、他方はオペラ劇場に使用可能。独立した建物だが、地下道によってファランステールと通ずる
・x、xx、y、yy、z、zz：農村部の建物に囲まれた中庭

【図 4】『産業の新世界』初版、1829年の「大階梯ファランステールの見取り図」とその凡例（著者作成）

4. 2. 弟子たちによる『産業の新世界』第2版の平面図（1845年）

次いでフーリエの死後の1845年に刊行された『産業の新世界』第2版（全集版）には、弟子たちが作成したより具体的な平面図「ファランステールすなわち産業ファランジュが居住する大邸宅の見取り図」【図5】が挿入されている。ファランジュ全体のなかでの配置を示した1829年初版見取り図【図4】と比べると、よりファランステール部分が拡大され、新たに建物の形態や中庭の植栽などの細部が描き込まれており、そのいっぽうで、運河の配置などは削除されている。つまり、フーリエ自身が関わった1829年の初版見取り図では未定だった具体的な細部が、1845年の第2版平面図では弟子たちによって決定されたのである。その一方で、1829年見取り図では下半分を占めていた農村部が2/3程度にまで圧縮されており、またこの部分については依然として単純化・抽象化されたままである（上半分ほど細部まで描きこまれていない）。つまり、ここでは上部の都市部・居住部への注目度・重要度が増しており、そのぶん下部の農村部・作業部への関心は相対的に減少しているといえる。この変化は、弟子たちによってフーリエの構想に発展的・創造的解釈が加えられたことを示している。



【図5】フーリエの弟子たちによる「ファランステールの見取り図」、『産業の新世界』第２版（全集版）、1845年収録

4. 3. 弟子コンシデラン作成の透視図2点

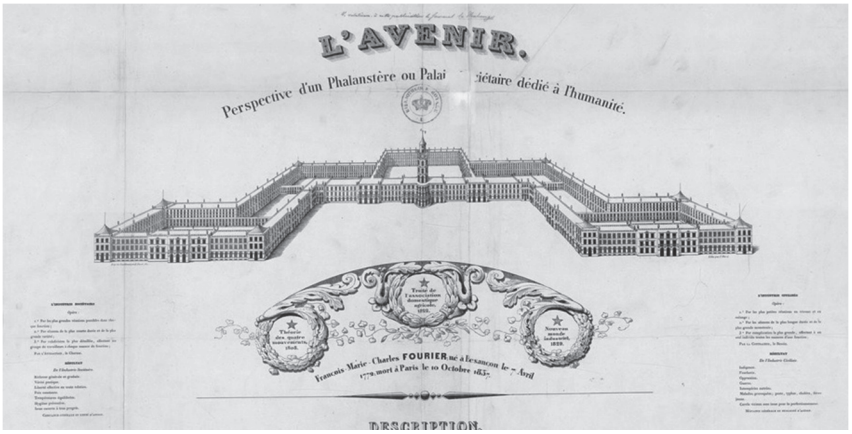
フーリエの弟子の一人ヴィクトル・コンシデラン（1808-93年）は、ファランステール上部の居住部分（下部の農村部に対する都市部）の透視図を描き起こし（ビーチャーによれば1834年のことである[27]）、それは『ファランジュ』第１巻（1836年刊行）のタイトルページにも再録されている【図6】。

この透視図はまた、彼自身の刊行したパンフレットにも再利用されている。「未来：ファランステールあるいは人類に捧げられたソシエテール（協同社会）の宮殿の透視図」（年代記載なし）である【図7】。下部に付された長い説明文は、フーリエによるファランステール構想についての、コンシデランによる解説である。その冒頭でコンシデランは、このファランステールの全体像が「まさにフーリエの平面図から導き出されたものである」ことを宣言している。

この透視図では、1829年配置図【図4】や1845年平面図【図5】の下半分を占めていた「農村部」はもちろん、独立して建造された建物（1829年見取り図のSとSS、1845年平面図のF、G）も省略され、ただ両翼をもつ中央の建築部分のみが独立して描かれている（この点では、フーリエ自身による透視図のデッ

サン【図1】に回帰しているともいえる）。同時に、1829年の配置図や1845年の平面図にはもちろん、フーリエ自身による透視図にも決定的に欠けていた細部の情報、つまり建築の「高さ」とさまざまな「意匠」が追加されている。建物は地上3階建てで、全面に規則正しく窓が開けられている。建物の中央には高い尖塔がそびえ、両翼の端にも三角屋根と小塔があしらわれており、全体的に壮麗さや象徴性が高められている。ここに体現されているのは、コンシデランの解釈を通してより具体化されたフーリエ構想の外貌である。

【図6】『ファランジュ』第1巻、パリ、ファランジュ書房、1836年刊行、タイトルページ（部分）Gallica. ark:/12148/bpt6k94117s



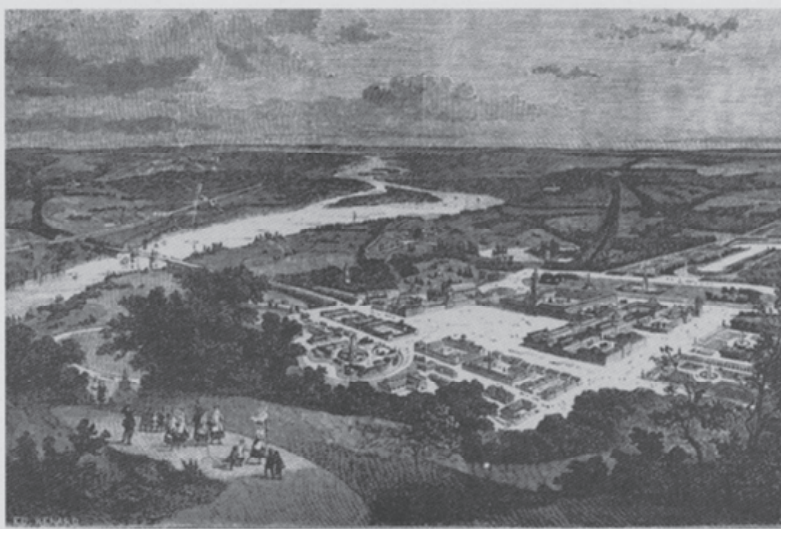
【図7】ヴィクトル・コンシデラン《未来：ファランステールあるいは人類に捧げられたソシエテール（協同社会）の宮殿の透視図》年代未詳（部分）Gallica. ark:/12148/bpt6k850954v

4. 4. 弟子たちによるファランステール全体の挿絵（1840年代）

ファランステールの新たな挿絵が生み出されるようになったのは、フーリエ主義運動が広範な支持者を獲得した1840年代のことである[28]。ファランステール書房から出版されたリトグラフ【図8】に、ビーチャーは新たな産業形態と移送のテクノロジー、つまり工場と鉄道の現れを看取している。すなわち、「ファランステールの中心となる建物こそまだヴェルサイユ宮殿のような形をしているが、工場用の設備（煙突に注目）がしつらえられており、鉄道まで敷設されている（上部左側にわずかに見える線路と列車に注目）[29]」というのである。

また、『イリュストラシオン』誌1846年3月7日号にはフーリエのファランステールについての解説記事が掲載されたが、そこには弟子たちによる透視図【図9】も添えられていた。下部には「ファランステー

ルの構想（projet）」と書かれ、また左下にはリトグラフ彫版を手がけた版画家シャンパン（Champin）[30]の署名がある。記事の全容は、２ページと数行にわたるテクストに、フーリエの肖像画とこの透視図の計2枚の図版を添えたものである。記事は全体的に修飾や修辞の多い美文調で、田園詩めいた描写で始まり、誠実な解説というよりは、フーリエの称揚を目的とするもののように思われる。ファランステールの図版も、もはや建築図面としての性質を失い、むしろ書物の挿絵に近づいている。



【図8】A. モーリズに基づきジュール・アルヌー彫版《フーリエの理論に基づいて組織されたファランステールと呼ばれる村の全体図》1840年代、ファランステール書房刊行。

【図9】『イリュストラシオン』第7巻第158号、1846年3月7日刊行、5頁より、ファランステールの透視図。

ここまでの作例分析を概括すれば、フーリエによる理論の視覚化・具体化に弟子たちが介入し、死後は完全に弟子たちに委ねられるようになって、付随的細部や装飾的要素が追加されていくと同時に、フーリエ構想の根幹にあったはずの構造が見えづらくなり、また建築のための設計図という性質も薄れていった、といえるだろう。この流れを図式化するならば、フーリエのダイヤグラムから弟子たちによるイラストレーションへ、とも整理できるのではないだろうか。そしてこのプロセスにおいては、情報の付加と脱落や省略、消去が同時に起きている。1830年代以降、弟子たちはフーリエ理論の「現実化（réalisation）」に励

むようになり、1840年代以降はフーリエ主義として社会に広まってゆく。それはしばしば指摘されてきたように、フーリエ自身のテクストからは次第に乖離してゆくものである。ファランステールの建築構想の図示において起きた段階的な変化は、このようなプロセスとも相互的な影響関係をもつものである。

5. 結語にかえて

本稿では、シャルル・フーリエの共同体構想における「建築」に着目し、その特徴的な要素を「循環、流れ、多孔性」と規定したうえで、それらを都市・建築と身体をめぐるより巨視的な思想史的文脈のなかに位置づけることを試みた。具体的には、フーリエによる社会改革思想における「建築構想」の位置づけとその内容、および同時代の思想との関連や後代における受容を明らかにした。すなわち、まずは同時代的な特徴である「流れ」や「循環」を旨とし、外部と内部の両義性をもつ「通路、回廊」的な都市空間と、フーリエにおける共同体や空間の構想との間の関係を検証した。さらに、フーリエの建築構想が図的表現にどのように体現されているのかを、後年の弟子たちによって追加された「変容」から逆照射し浮かび上がらせることを試みた。

国外調査をめぐる状況や紙幅の都合などもあり、本稿で達成できたのは、資料の一部分を抽出したうえでの分析や考察である。これは、この後に計画している、草稿や書簡類も含むフーリエ著作のより網羅的で総合的な分析の準備段階に相当する。またファランステールの図的表現に生じた変化についても、フーリエ自身の執筆過程、弟子たちによる草稿の書き換え、その後の「フーリエ主義」の言説のそれぞれを精緻に分析したうえで、その変容が物語るものについて、個別に検討することを予定している。そのうえで、18世紀後半から19世紀にかけての「流れ」と建築・都市の空間配置と身体の管理というテーマ、具体的には空気、歩行（人の流れ）、物流、人々の交流、遠隔通信といった個別の論点との相互関係を解明することが、この後に続く研究での次なる目標である。

註

1　ディドロ『ラモーの甥』（1761-74年執筆、死後出版）には、「好天だろうと悪天だろうと、夕方の5時頃にパレ=ロワイヤルに散歩に行くのが私の習慣である」との記述がある。Diderot, *Le neveu de Rameau : satire*, Paris : Librairie Plon, 1891, p. 1. Gallica. ark:/12148/bpt6k5699166t

2　シャルル・ボードレール「現代生活の画家」1863年、ヴァルター・ベンヤミン『パサージュ論』1927-40年。

3　フランスの交通・通信網とサン=シモン主義との関係については、Pierre Musso, *Télécommunications et philosophie des réseaux, la postérité paradoxale de Saint-Simon*, Paris : PUF, 1997などを参照。

4　1841-43年に『普遍的統一の理論（*Théorie de l'unité universelle*）』と改題し再刊、こちらはアントロポ版全集第2-5巻に再録あり。

5　Fourier, *OC* II, p. 209. 邦訳は引用者による。アンヴァリッド地区にあるアカシア通りとヌーヴ・プリュメ通りについては、19世紀に刊行された次の事典に記述がある。Félix Lazare et Louis Lazare, *Dictionnaire administratif et historique des rues de Paris et de ses monuments*, 1844（Gallica. ark:/12148/bpt6k200946t）の「ACACIAS (RUE DES)」および「ACACIAS (PETITE RUE DES)」、「PLUMET (RUE NEUVE-)」の項目を参照。

6　石井『科学から空想へ』253ページ。

7　本稿執筆時点では、Archives Nationales（フランス国立古文書館）に収蔵されている書簡の現物（資料番号10AS 15(18)）を閲覧することができなかったため、便宜的にPellarin, *Charles Fourier*, p. 175より再引用した。邦訳は引用者による。

8　Fourier, *OC* X, PM (1851), p. 17. 邦訳は引用者による。

9　Vidler, *L'espace des lumières*, p. 309.

10　ビーチャー『シャルル・フーリエ伝』60ページ。フーリエによる1796年12月のボルドー市局宛書簡（*Lettre sur la reconstruction de Bordeaux*. Marseille, 20 frimaire, an V.）は、フランス国立古文書館（Archives Nationales）に資料番号10AS 15 (18)として所蔵されている（https://www.siv.archives-nationales.culture.gouv.fr/siv/UD/FRAN_IR_024158/d_1_1_15、オンラインでのデータ公開は未済）。本稿執筆時にフランス国立古文書館で現物資料を閲覧することができなかったため、ここでは便宜的にビーチャー『シャルル・フーリエ伝』からの再引用とする。以下、このボルドー支局宛書簡の引用や言及については同様。

11　ビーチャー『シャルル・フーリエ伝』60ページ（AN 10AS 15 (18)）。

12　ビーチャー『シャルル・フーリエ伝』56ページ（AN 10AS 15 (18)）。

13　ビーチャー『シャルル・フーリエ伝』60ページ（AN 10AS 15 (18)）。
14　Richard Etlin, « L'air dans l'urbanisme des Lumières », dans *Dix-huitième Siècle*, n° 9, 1977 ; Le sain et le malsain, p. 123-134. doi : https://doi.org/10.3406/dhs.1977.1119 また、アラン・コルバン『においの歴史』126ページ以降では、18世紀以降のフランスにおいて、いかに「換気」や「空気の流れ」の制御が建築や都市計画にとって重要な軸となっていたかが詳述されている。
15　ビーチャー『シャルル・フーリエ伝』60-61ページ（AN 10AS 15 (18)）。この引用部の後にフーリエは、建物の敷地面積と同等以上の空いた土地が家屋内に必要であること、建築物の間は12m以上空けるべきこと、通りに面した建築物の高さは道幅以上であってはならないことなどの準則を列挙する。
16　フーリエはルドゥー設計のテリュソン邸を賞賛し、その取り壊しを嘆いている。Fourier, *OC* II, p. 189, 209; *OC* XII, p. 705.
17　Fourier, *Le nouveau monde industriel*, 1829, p. 145. 邦訳はフーリエ『産業の新世界』福島知己訳、177ページ。
18　Fourier, *Le nouveau monde industriel,* 1829, p. 150. 邦訳はフーリエ『産業の新世界』福島知己訳、180-181ページ。
19　Fourier, *Le nouveau monde industriel*, 1829, p. 152. 邦訳はフーリエ『産業の新世界』福島知己訳、182-83ページ。
20　バルト『サド、フーリエ、ロヨラ』新装版、154ページ。
21　ビーチャー『シャルル・フーリエ伝』215ページ。
22　Fourier, *Le nouveau monde industriel*, 1829, p. 149. 邦訳はフーリエ『産業の新世界』福島知己訳、180ページ、ただし訳語の一部を改めた（rue-gallerie＝遊歩廊を回廊式通路に、communication＝連絡路を連絡通路に）。
23　ベンヤミン「パリ――十九世紀の首都 梗概〔フランス語稿〕」浅井健二郎編訳、久保哲司・土合文夫訳、ちくま学芸文庫、49-50ページ。
24　Walter Benjamin, « Paris, capitale du XIXe siècle » (1939), p. 7. https://www.urbain-trop-urbain.fr/wp-content/uploads/2011/04/Benjamin_Paris-capitale-du-XIXe-siècle.pdf
25　フーリエの建築デッサンは、邸館と住宅の計画、ファランステールの計画、およびブザンソンのための建築計画の3グループがあり、フランス国立古文書館（Archives Nationales）の資料番号AN 10AS 23/18に収められている（ウェブ公開は未済）。フーリエによる建築デッサンについては、図版の引用も含めて、Vidler, *L'espace des Lumières*, 1995、および論文集*Cahiers Charles Fourier*, n° 24 (Le phalanstère représenté), 2013で詳細に論じられている。
26　福島知己による訳者解題より、フーリエ『産業の新世界』679ページ。
27　ビーチャー『シャルル・フーリエ伝』口絵ページ図16に付された解説。
28　ビーチャー『シャルル・フーリエ伝』口絵ページ図16に付された解説。
29　ビーチャー『シャルル・フーリエ伝』口絵ページ図16に付された解説。
30　19世紀に油彩画、水彩画、リトグラフの分野で活躍した画家ジャン=ジャック・シャンパン(1796-1860年)とみて間違いないだろう。彼は1835年から54年にかけて、『イリュストラシオン』誌のリトグラフ制作を手がけた。

【参考文献】

一次文献：フーリエの著作

FOURIER, Charles, *Œuvres complètes de Charles Fourier*, 12 vols., Paris : Éditions Anthropos, 1966-1968.［本文中では*OC*と略記］

――――, *Traité de l'association domestiqueagricole*, Paris et Londres : Bossange, 1822, t. I. Gallica. ark:/12148/bpt6k10455187

――――, *Le nouveau monde industriel et sociétaire, ou invention du procédé d'industrie attrayante et naturelle distribuée en séries passionnées*, Paris : Bossange père, 1829. Google Books.

フーリエ著作の翻訳

フーリエ、シャルル『四運動の理論』（1808年）、上下巻、新装版、巖谷國士訳、現代思潮新社、2002年。

――――『産業の新世界』（1829年初版、1845年第2版）福島知己訳、作品社、2022年。

――――『愛の新世界』（草稿の死後出版）福島知己訳、作品社、2006年。

二次文献

ANTONY Michel, BOUCHET Thomas, « Bibliographie : Fourier », *charlesfourier.fr*, rubrique « Bibliographies (tout ou presque sur...) », mai 2014. http://www.charlesfourier.fr/spip.php?article1328［2022年9月17日閲覧］

BARTHES, Roland, *Sade, Fourier, Loyola*, Paris : Éditon du Seuil, 1971.［バルト、ロラン『サド、フーリエ、ロヨラ』新装版、篠田浩一郎訳、みすず書房、2002年。］

BEECHER, Jonathan, *Charles Fourier: The Visionary and His World*, University of California Press, 1986.［ビーチャー、ジョナサン『シャルル・フーリエ伝：幻視者とその世界』福島知己訳、作品社、2001年。］

BENJAMIN, Benjamin, « Paris, capitale du XIXe siècle » Exposé en français, 1939.［ベンヤミン、ヴァルター「パリ――19世紀の首都　梗概〔フランス語稿〕」、『パリ論／ボードレール論集成』浅井健二郎編訳、久保哲司・土合文夫訳、ちくま学芸文庫、2015年；「パリ――19世紀の首都〔フランス語草稿〕」、『パサージュ論』第1巻、今村仁司・三島憲一ほか訳、岩波書店、2003年。］

CORBIN, Alain, *Le miasme et la jonquille : l'odorat et l'imaginaire social 18e–19e siècles*, Éditions Aubier-Montaigne, 1982.［コルバン、アラン『においの歴史：嗅覚と社会的想像力』山田登世子・鹿島茂訳、藤原書店、1990年。］

DEBOUT, Simone, *L'utopie de Charles Fourier*, Paris : Payot, 1978.［ドゥブー、シモーヌ『フーリエのユートピア』今村仁司監訳、平凡社、1993年。］

FOUCAULT, Michel, *Les Machines à guérir : aux origines de l'hôpital moderne*, P. Mardaga, 1979.

石井洋二郎『科学から空想へ：よみがえるフーリエ』藤原書店、2009年。

北河大次郎『近代都市パリの誕生：鉄道・メトロ時代の熱狂』河出ブックス、2010年。

PELLARIN, Charles, *Charles Fourier : sa vie et sa théorie* (2e édition), Paris : 1843.　Gallica. ark:/12148/bpt6k83199h

VIDLER, Anthony, *L'Espace des Lumières. Architecture et philosophie de Ledoux à Fourier*, Paris : Picard, 1995.
————, « Fourier l'architecte », tr. Philippe Roger, dans *Critique*, n° 812-813, janvier-février 2015, p. 47-65. https://www.cairn.info/revue-critique-2015-1-page-47.htm
Cahiers Charles Fourier, n° 24 (Le phalanstère représenté), les presses du réel, 2013.

小澤　京子（和洋女子大学 人文学部 日本文学文化学科 教授）

（2022年11月15日受理）